

1500セットの机とイスを マレーシアとフィリピンへ寄贈

大切に使った備品を役立てたい 自発的な行動が大きな実を結ぶ



学院創立120周年記念事業のひとつとして、このたび中学校と高校の机とイスが新しくなりました。それに伴い、中学校・高校生徒会役員の生徒たちが中心となって、古くなった机やイスをフィリピンとマレーシアの学校へ寄贈する活動を実施。「ずっと大切に使ってきた机やイスを、喜んで使ってもらえたら」と生徒たちが自ら発案した今回の活動は、「自立・自律・連帯」を育む大きなきっかけとなりました。

ポスターなどで文房具の 寄贈呼びかけ

このたび中学校・高校の机やイスが新しくなることを知り、中学・高校生徒会では「先輩方も大切にしてきたこの机をぜひ誰かに使ってほしい」と考えました。さっそく先生に相談したところ、日本国際飢餓対策機構の協力を得て海外の学校に寄贈することが決まりました。

中学校の机とイス1000セットはマレーシアに、高校の机とイス500

セットはフィリピンの学校に送ることとなりました。「新しい文房具も一緒に贈りたい」と各生徒会が校内で寄贈の呼びかけを行うことに。高校では送り先であるフィリピンの写真を掲載したポスターを作成し、生徒の目に留まりやすい中央階段に掲示。また登校時に下足箱で寄贈の呼びかけをしたところ、段ボール4箱もの真新しい文房具が集まりました。

中学校の机とイスは7月23日に発送。生徒たちは夏休みに入る直前に自分が使っていた机とイスを掃除し、

発送当日は生徒会役員が中心となって運搬を手伝いました。積み込まれたコンテナは7月26日に名古屋港を出港、8月下旬にマレーシアに到着しました。

高校の机とイスは1ヶ月後の8月23日に発送。「これで一生懸命勉強をしてほしいと思いながら運搬をしました」と生徒会の皆さん。生徒たちの思いを乗せて、机とイスは無事海を渡っていきました。

手紙を通して伝える思い

各生徒会の役員は、寄贈先の学校で学ぶ子どもたちに向けて手紙を書きました。「これで一生懸命勉強をしてほしい。ぜひ大切にしてください」などのメッセージを英語で筆記。手紙は今回発送する机やイスとともに手渡され、寄贈に込めた思いを伝えました。また中学校生徒会でも「先輩や自分たちが大切に使ってきた机をさらに大切に使ってもらえたらうれしい」とメッセージ。「20年以上も前の先輩から受け継がれてきた大切な机が海を渡り、違う国の人と共有できるのはうれしい」などの声が聞かれました。



中学・高校生徒会役員の皆さん



机やイスの寄贈を自発的に提案 社会貢献を通して育てる自立性

生徒たちが自発的に考え、行動した机とイスの寄贈。活動を通して育まれる自立性や教養について、深谷校長にお話を伺いました。

中学・高校では120周年記念事業の一環として「女子教育にふさわしい環境づくり」を進めてまいりました。昨年度よりトイレや教室の改修工事を行い、今回、その120周年記念事業の締めくくりとして机とイスを新調することとなったのです。



中学・高校ともにトイレや教室の改修に関してはすべて生徒たちの意見を取り入れています。今回の机とイスに関してもさまざまな意見をもとに、最終的に生徒たち自身が選びました。新しい机やイス(写真右下)は人間工学に基づく形で使いやすく、丈夫で長持ちするものです。「将来自分の子どもを金城に通わせて、このイスに座らせたい」と机やイスを選ぶ生徒たちに、学院に対する深い思いを感じました。

さらにその古い机やイスを外国の学校に寄贈することを考え出したのも生徒たちです。自分たちが使ってきた机やイスにはそれぞれ深い思いがあるのでしょうか。「捨てるのは心が痛い。今のままで使ってもらえるところがあれば寄贈したい」との相談を受

け、日本国際飢餓対策機構にお願いすることにしました。実は日本国際飢餓対策機構の清家先生には以前、キリスト教行事の中で「世界の飢餓状況について」と題して講演をしていただいたことがあります。このことがご縁で学院との関係が深まり、今回の寄贈にご尽力をいただくことに。フィリピンとマレーシアの学校に寄贈する手配を整えていただきました。



寄贈が決まってから、生徒たちは「まだ自分たちにできることはないか」と考え、未使用の文具を集める活動を実施。校内などで一生懸命呼びかけをし、その結果多くの文具を机やイスと一緒に寄贈することができました。ただ単に机やイスを寄贈するだけではなく、そのことをきっかけに生徒たちが自発的に善意の輪を広げる。こう

した生徒たちの心の成長を大変嬉しく感じております。

私は生徒たちにいつも「ピースメーカーになれ」と話



深谷昌一 校長

をしています。いろいろな人と和解をし、また関係していく力を身につけながら愛や平和を生み出す人になってほしいと願っているのです。また今回のような寄贈に限らず、自らが自発的に考え、行うことが大切だとも常に教えています。まずは企画し、考え、それは自分にも相手にとってもどんな意味があるのかを考えてほしい。そして生徒たちが考えたことに関しては、できる限り実現できるようにサポートするのが教師の役目だと思っています。それと同時に今回の寄贈のように「共に生きる」をスローガンとして、環境に配慮する心や社会に貢献する気持ちも持ち続けてほしいと願っております。

先日、中学校の文化祭ではフェアトレード(*)に関する展示や発表を行いました。生徒たちはフェアトレードを学ぶことによって、知らず知らず人を苦しめていることに気づいたと思います。それこそまさに「隣人を愛する」という愛と奉仕にあふれたキリスト教の精神に通じるもの。今後もこのような機会を通じて、生徒たちの「自立・自律・連帯」の力を育てていけたらと思っています。

(*)途上国の生産者に公正な賃金や労働条件を保証した価格で商品を購入することで、途上国の自立や環境保全を支援する国際協力の新しい形態。



マレーシア コタキナバルに新設されたテンギラン ビジョン スクールで使われる金城学院の机・イス。以前の机(写真左)から新しくなり、喜んで勉強する子どもたち